
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

AA 研共共課題「身体性の人類学：もの人類学的研究（4）」

2023 年度第 1 回研究会（通算第 3 回目）

日時：2023 年 6 月 11 日（日）14:00-18:30

場所：AA 研 306

14:00-16:00 ケイトリン・コーカー（北海道大学）

「身体の世界化- 踊る人類学の制限と可能性」

16:30-18:30 田中雅一（国際ファッション専門職大学）

「ファッションナブルな身体」

概要：2023 年 6 月 11 日（日）に 2023 年度第 1 回の研究会を実施した。

北海道大学のケイトリン・コーカー氏、及び国際ファッション専門職大学の田中雅一氏による報告と参加者全員による質疑応答が実施された。それぞれの報告内容は以下の通りである。

報告 1： 「身体の世界化と身体的な世界づくりー踊る人類学の可能性」

ケイトリン・コーカー（北海道大学）

本発表は、発表者のかつての研究に振り返るところから始まった。これは、身体を土台にダンス・踊りはどのように生まれてくるのか、そして踊るときに何が起きているのか、という問いに導かれてきたものである。このため、発表者の研究ではダンス作品の制作過程に注目し、運動する身体が様々なモノとの関係の中で何をなし得るのか [トゥルーズとガタリ 1994(1980)] を提示してきたことを紹介した。

このかつての研究では、発表者の身体感覚は相手の身体・踊りを理解するためのツールになり、発表者の身体は媒体になってきたことも示した。研究者が踊ることは調査方法と提示してきたが、踊ることがいかに思考法そして研究結果の発表形態でもあるのかは未だに明示していないと述べた。つまり、研究の中で、踊ること、身体で感じることに注目をしていたが、その思考と結果を言語化し、学問のかつてのフォーマットに落とし込んできたことに疑問を抱くようになった。

このフォーマットというものは、言語中心主義かつ理性中心主義的な傾向があり、さらにい

えば、心身二元論をはじめ、身体を取り巻く内部・外部や、個人・社会、女性・男性、物質・表象などの諸二元論に陥りがちな傾向がある。本研究はこれらの傾向を補完したく、踊りそのものを人類学の調査方法のみならず、思考法（プラクシス）・発表形態（パフォーマンス）とすることを提案した。

まず本発表の第一部では、発表者は身体の世界化を体験あるいは体現するために研究会の参加者と共に身体を動かすプラクシスを行った。一つ目は、身体の動きを止めようとする一方で、逆に身体の内部的な動きを感じ取るものであった。二つ目は、二名の参加者と共に大きな縁を描きながら空気を動かす身体運動を通して、研究会という場もしくは世界がいかに変容していくのかを示唆するものであった。このように、身体の内部と外部が変容して開かれる身体運動そのものは踊り、あるいはダンスという再定義を試みた。フィールドワークの事例を用いて、踊りはプラクシスのみならず、パフォーマンスとして研究結果の適切な発表方法にもなると述べた。

このように身体運動を用いた研究方法および教育方法があると考えられるが、これらの方法を運用する上で身体の政治性を考慮する必要があると論じた。とくに、発表者はこれらの方法を取り入れている教育現場でハラスメントと思われる暴力的な表象に合っていることを提示した。これらの表象の問題に直面しないと研究が進まないという思いをもって、第二部では、これらの表象をフィールドの事例として提示し、これらに対して発表者の自己表象つまり自己民族誌 [Pratt 1992, 田中 2007] の可能性、つまり身体による世界づくりについて考察した。最後に、身体性に注目する上で差別をなくす運動が必要であると主張した。

質疑応答の際、鋭い質問および貴重な指摘を多々もらった。まず、第一部のプラクシスは素晴らしいが、第二部との繋がりが明白ではないという指摘もらった。他の参加者からは、第一部と第二部とのつながりがよくわかったというご意見をもらった。発表者にとって、第一部には第二部が必要であるが、二部とも同時に扱って論じることは難しかった。今後は第一部と第二部を分けて、それぞれを丁寧に深めていくことを試みたいと考えるようになった。とくに、第一部のプラクシスとパフォーマンスの可能性をさらに掘り下げて、教育現場での実施をフィールドノートとしたいと考えている。また、本発表に言及された「思考法」や「媒介」は何であるかという質問、そしてティム・インゴルドの『応答、しつづけよ』[2023]に書かれている「思考」や『イメージの人類学』[2018]のいう「イメージ」がヒントになるという指摘を受けて、今後はこれらの概念を整理したいと考えている。

第二部に関するディスカッションから、それぞれの表象について分析と考察を深める必要があると考えさせられた。参加者から多々の共感の言葉ももらって、非常に励みになった。発表の中では女性のプロデューサーと画家の表象が発表者にとってのアライになると考えていたが、これらの表象においても違和感を覚えていることに気づかされた。現在は踊りのパフォーマンスそのものを自己表象つまり自己民族誌にするという新たな方向性について考えていきたいと考えている。(終)

報告2：「ファッションナブルな身体——接触・増殖・移植」

田中雅一（国際ファッション専門職大学）

本発表の目的は、共同研究の課題である「身体の拡張性」を、主として衣服に言及しながら接触、増殖、移植という観点から吟味することである。身体についての私たちの基本的な考えは、私の身体は、唯一無二の身体という考えであろう。唯一無二が意味するところは、「私の身体」の境界が明確で、他の身体と交わるものではない（身体の不可分性 *individuality*）、他に同一の身体が存在するわけではない（特殊性 *uniqueness*）、他の誰でもない「私の」身体という自明性（同一性 *identity*）を意味する。これらの3つの位相が、それぞれ接触、増殖、移植に対応する。接触は、ファジーな身体を意味し、感染呪術、伝染、皮膚感覚、開口部へのケア、体液、体毛、声音、（非接触な）同期などに関係する。増殖は、同一あるいは類似の身体が存在を意味する。それらは類感呪術、人形、双子、分身、身代わり、クローン、アバターなどに関係する。最後に移植だが、これは複数の<私>が同一身体に内在する場合である。憑依、仮面、変身、着ぐるみ、身体（の一部）の他者化、サイボーグ、キメラなどが想定できる。

本発表では、拡張に対比される萎縮についても論じる。これによって、身体と環境との関係をよりダイナミズムに迫ることが可能となる。

衣服との関係で言えば、接触はとりわけフェティッシュ・ファッションと呼ばれるジャンルに注目した。フェティッシュ・ファッションとは、黒のレザーあるいはゴム、ラテックス製の衣服で、コルセット、ピンヒール、ブーツとの組み合わせを特徴とする。独特の匂いや肌触り、自分の体を締め付けなどの非日常的な皮膚感覚が強調される。これらは、SMプレイで使用される拘束具を喚起させるが、着用する側から見ると、匂いや皮膚感覚などとの関係でフェティシストの欲望と重なる。

増殖については、メモリアル・ファッションと発表者が呼ぶ衣服のあり方を紹介した。メモリアル・ファッションとは、生前その衣服を着用していた人物や、彼／彼女に死をもたらした出来事の記憶を想起する媒体（メディア）としての衣服（素材となる布、さらにカツラ、装飾品、義肢など身体に関わる人工物を含む）である。それは、死者を想起するだけでなく、死をもたらした原因を想起する衣服である。すなわち戦争、災害、ジェノサイド、強制失踪、感染症、強制収容での死を想起する。この意味で、メモリアル・ファッションは集合的記憶と個人的記憶が交差する衣服と言える。死者はメモリアル・ファッションを通じて生き延びるのである。

最後に移植である。移植は身体の一部が他者に支配されているような状態である。例えば、頭から足の先までブランドものを身に纏う行為であろう。シャネラーは、シャネルに身を委ねている消費者といえる。アムラーは、ブランドではないにしても安室奈美恵と同じスタイルを取ることで彼女との一体感を示している。だが、こうした実践は身体の萎縮と紙一重で

もある。なぜなら、アムラーたちは類似のスタイルを採用することで他者との一体感を感じることで自身の身体を拡張しているともいえるし、個性を否定しているともいえるからだ。同じことは、ユニフォームなど集合性を強調する衣服についても当てはまるはずだ。

自分の身体が他者に支配されて萎縮していると感じられる典型は、性暴力被害にあった身体であろう。性暴力は身体の境界が脆弱であることを示すだけでなく、その後も他者による支配が続く典型的な事例と言える。

本発表では、身体と環境とのダイナミズムを拡張と萎縮という観点から論じた。拡張の位相として、接触、増殖、移植の3つに分けて事例を提示した。衣服に注目することで、「ファッションナブルな身体」の可能性を考察することができた。

(以上終わり。)